

(こくさいか山口 2006年1→3月号掲載記事)

## ～第二の故郷へ送るエール～

下関市総合政策部国際課  
(釜山広域市派遣職員)  
古川 力

私にとって韓国生活2度目の冬、そして最後の冬を迎えています。関東よりも北で暮らした経験のない私には、韓国の冬は非常に厳しく、「顔を刺すような寒さ」を日々感じておりますが、こちらで韓国全土の天気予報を見ていると、釜山はそれでも冬の韓国で「一番暖かい」場所で、「他の地域の寒さを考えればこれくらい…」と戒めながら日々を過ごしている次第です。

民間企業等の皆さんは、一度海外に赴任するとおよそ3～5年間は滞在しているようです。私の場合は派遣職員という制度上、2年と決まっておりますので、この3月には早くも帰国となるのですが、もう数年この地に住むことができたなら、韓国をさらに深く理解できるわけですから、韓国に対する見方も少し変わってくるのかも知れません。

2005年を振り返りながら、釜山とのこれからについて考えてみたいと思います。

2005年の釜山市のスローガンは「プサヌルパックジャ！（釜山を変えよう！）」でした。

当年の釜山はなんといってもAPEC首脳会談の開催・並びにそれが成功に終わったことが何よりも大きなニュースです。

11月、世界中に「Busan、Korea／大韓民国・釜山市」の名前がとどろきました。首脳会談開催前後の市内は厳戒態勢となり、市庁舎等の公共施設や百貨店等の出入り口等、いたるところで金属探知機が設置され、重装備の兵士が市中を警備に回るなど、重々しい雰囲気となりました。

対外経済政策研究院（KIEP）の李景台（イ・ギョンテ）院長によれば、APEC開催による経済効果は、投資誘致効果、間接的な誘発効果等を含めて約4700億ウォン（約530億円）と試算されています。日本では釜山を知らない人はほとんどいないとは思いますが、毎日のように釜山がニュースで流れると、「今度休みを取って釜山に遊びに行こうかしら」といった、韓流ブームとの相乗効果で間接的に釜山・韓国に旅行を、という人もこれから多く出てくるかも知れません。

11月16日（水曜日）は広安里海水浴場で韓国史上最大規模、8万発という空前の大花火大会が開催され、大混雑緩和施策等の課題は残りましたが、会議参加者はもとより市民、観光客の方々に大いに喜ばれたようです。

私がこの地に赴任した2004年4月から1年半強の間に、釜山市内も大きく変貌しました。海外からのお客様をお迎えするため、金海空港や釜山港国際旅客ターミナル及びそこから中心市街地へ向かう主要道路を中心に見違えるほどきれいになり、植栽の増加、バス停留所の更新整備、歩道の補修、交通標識等の付け替え、そして地

下鉄3号線の開通と、みるみるうちに都市景観が変化してきました。

そして、11月15日には、許南植（ホ・ナムシク）釜山市長が、「2020年の夏季五輪を釜山市に招致し、平壤（ピョンヤン・朝鮮民主主義人民共和国）との共同開催をしたい」と五輪誘致を正式表明しました。現在釜山市は2009年のオリンピック総会並びにIOC総会開催候補地である9都市の一つとしてノミネートされており、来年2月の結果発表を待っている状況ですが、APEC開催都市、その後の五輪開催地への立候補、ソウル五輪で実現できなかった平壤との共同開催。論法の中身一つ一つが非常に説得力があり、意気込みを感じさせられます。釜山が「第二の故郷」となった私としても、なんとしてもこれらすべてを勝ち取って欲しいと願っています。いや、釜山ならできると信じております。



ヌリマル・APECハウス  
(APEC首脳会談会場・海雲台)



APEC記念花火大会  
(広安里海水浴場 11月16日朝鮮日報より)



2020年五輪招致を表明する  
許南植（ホ・ナムシク）釜山市長  
(11月15日慶南日報より)

さて、日韓関係の2005年とはといえば、「日韓友情年2005」といいつつも、歴史教科書問題や、領土問題等により両国間でいろいろな問題が発生しました。中には姉妹都市交流の絶縁といった問題も発生し、大部分は徐々に回復の兆しを見せてはいるものの、依然として厳しい状況も見られます。

ここ釜山ではそういった問題はほとんどなく、経済交流はもちろんのこと、日本各地との交流も非常に盛んです。ご存知かも知れませんが、釜山市役所には現在私の他にも福岡市からの派遣職員も来られており、地域経済力で大きな力をもつ福岡市は高速船の往来も盛んなため、行政交流都市として様々な交流活動が行われています。このほか、長崎市、大阪市などとも観光事業をベースに盛んな交流が行われています。12月には北海道との交流も公式にスタートしました。

このような意味で、釜山市は韓国の中でも特にビジネスライクに「大人」のお付き合いのできる都市として非常に頼り甲斐のあるパートナーだと思います。日本とは、地理的に極めて近い位置関係にある山口県、下関市としても、今以上ビジネスのチャンスや体育、芸術、文化等様々な分野でチャンスを見つけていろいろなお付き合いをしていって欲しいと思いますし、私自身もここで知り合い、お世話になった方々を一生大切にしながら、帰国後も私なりの交流をできる限りやってみたいと思っています。

APECを成功裡に終えたことで今や釜山市は世界に名を馳せる都市として知名度を高め、ステータスを上げ、そしてこれが2020年のオリンピック誘致で成熟する、というシナリオは、考えるだけですと非常に簡単明快ですが、実際にそれに向かっていくエネルギーは大変です。表面の盛り上がりとは裏腹に釜山市の経済は大変冷え込んでおり、経済の活性化も大きな課題の一つです。しかし、「2020年、都市の完成」を目指して着実に前進をしている釜山市は必ず厳しい部分を確実に克服するエネルギーを持っていると思います。そんな釜山市に、得がたい経験を与えてくれた私の第二の故郷として、心からエールを送りたいと思います。釜山広域市、ファイティン！

皆さまにおかれましても、国こそ違いますが、大きなポテンシャルを持ち、絶えず変化を遂げ、ほんの200kmの距離、そして「家族」である釜山市のもついろいろな長所を、どんどん参考にさせていただけたらと思っています。

私の本紙「こくさいか山口」への寄稿はこれで最終回となりました。2年間8回にわたり、拙いレポートにお付き合いくださり、ありがとうございました。

最後になりましたが、2006年が皆様にとりまして一層素晴らしい年になりますことをお祈り申し上げます。